

陳情第12号「錢座防空壕群の保存・活用を求める陳情」について

目次	ページ
1 九州新幹線西九州ルート建設工事現場（天神町地内） で確認された防空壕跡について	1～2
2 位置図	3
3 朝日新聞記事	4
4 現場状況写真	別冊

原爆被爆対策部

まちづくり部

平成30年9月



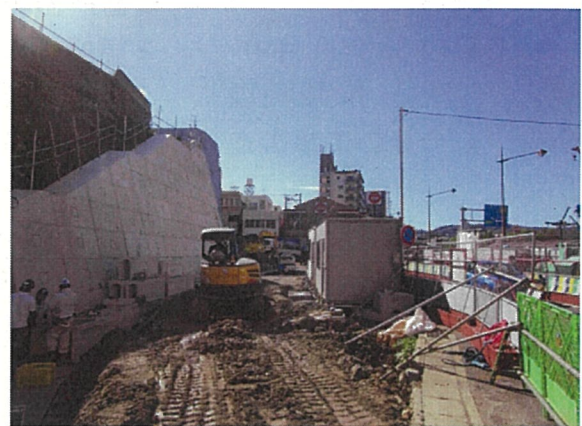
1 九州新幹線西九州ルート建設工事現場（天神町地内）で確認された防空壕跡について

（1）概 要

九州新幹線西九州ルート（事業者：鉄道・運輸機構）の新長崎トンネル坑口付近（天神町地内）の建設現場において建物を解体したところ、2月に法面に複数の防空壕跡が確認されたもの。現在、建設工事が進んでおり、全 15 箇所のうち9箇所が撤去されている。



平成 30 年 2 月 6 日現在



平成 30 年 9 月 10 日現在

（2）長崎市の方針

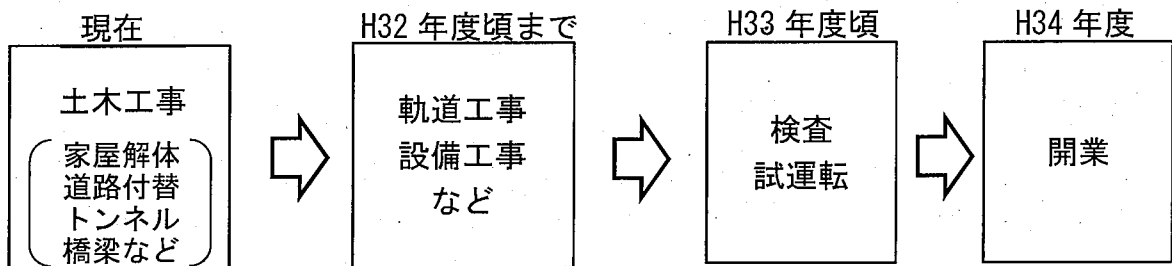
現在も市内に数多く残る防空壕跡の一つであり、被爆建造物としての保存対象とは考えていない。

【理由】

- 平成 30 年 2 月 6 日、地元関係者から情報提供があり、長崎市（原爆被爆対策部、まちづくり部）で現地を確認するとともに、事業者（鉄道・運輸機構）に協力要請を行い、防空壕跡の数、幅、高さ、奥行き等を計測し、壕外から写真撮影して現状の記録を行ったが、被爆の痕跡は見受けられなかった。
- 原爆資料館で保存している写真の中には、当該防空壕跡に着目して撮影しているものはなく、戦後、原爆の影響について克明に調査した「米国戦略爆撃調査報告書」「日本学術研究会議 原子爆弾災害調査報告書」にはこの防空壕跡についての記載は特になかった。また、「長崎原爆戦災誌」等、他の文献においても当該地域の防空壕の記述はあるものの、当該防空壕跡と特定できる記述はなかった。
- 今回の陳情趣旨にある証言は、朝日新聞記事に掲載された渡辺司氏の証言に基づくものと考えられるが、渡辺氏が生前に遺した手記やインタビュー記録を調べたところ、負傷した母親らと避難した防空壕は、「銭座町の防空壕」であるという記載があった。

なお、今回の防空壕跡は、新幹線建設工事に伴い新しく築造される擁壁や、車道・歩道の切替に支障があるところに位置しており、鉄道・運輸機構からは、「斜面の安定を図り、新幹線構造物の安全性を確保するためには、15 箇所全ての防空壕跡を撤去する必要がある。」との考えが示されている。

(3) 新幹線建設工事スケジュール (予定)



【防空壕への措置状況と今後の予定】

現在 9箇所撤去済み (番号5~13)
 平成30年9月中 2箇所撤去予定 (番号14~15)
 平成30年12月頃 4箇所撤去予定 (番号1~4)

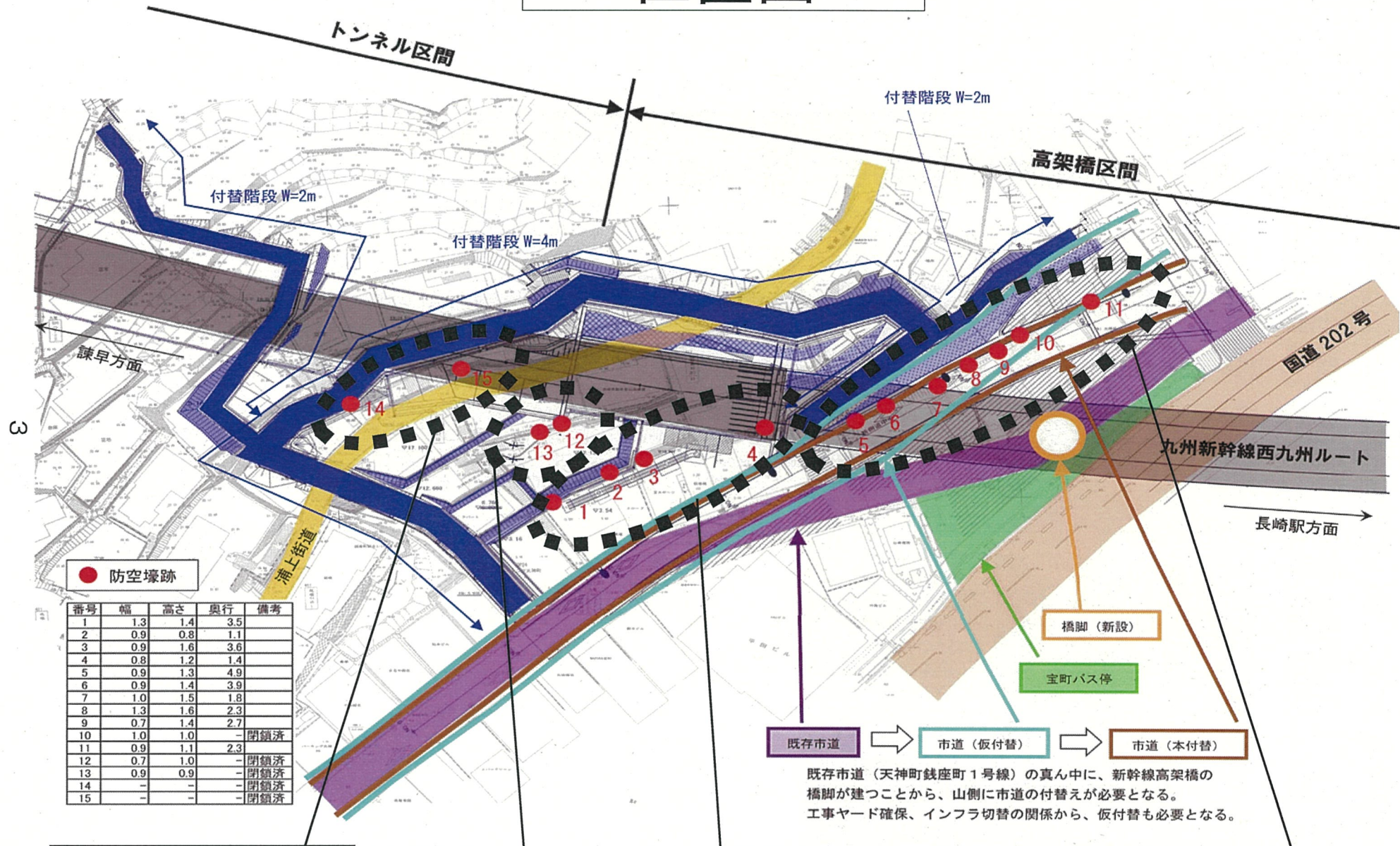
※今後の工事の進捗や施工計画の見直しにより、時期は変更となる可能性がある。

〔参考〕 これまでの陳情等の経過

※敬称略

期 日	内 容	団 体 名
平成30年2月20日	長崎市に対し要望	長崎地区労働組合会議 (議長 小宮伸二)、西坂・銭座小学校区勤労者協議会 (会長 中村住代)
平成30年2月27日	市議会に対し陳情 (3/7教育厚生委員会審査)	西坂・銭座小学校区勤労者協議会
平成30年3月13日	長崎市に対し申し入れ (1回目)	在外被爆者支援連絡会 (共同代表 月川秀文、岩松繁俊、平野伸人)、平和活動支援センター (所長 平野伸人)、平和公園の被爆遺構を保存する会 (代表 竹下 芙美)
平成30年3月16日	長崎市に対し申し入れ (2回目)	同上
平成30年4月9日	「 <u>銭座防空壕群を保存する連絡会</u> (共同代表 中村住代・月川秀文)」を結成	〔構成団体〕西坂・銭座小学校区勤労者協議会、在外被爆者支援連絡会、平和活動支援センター、平和公園の被爆遺構を保存する会、長崎地区労働組合会議
平成30年4月18日	長崎市に対し申し入れ (1回目)	<u>銭座防空壕群を保存する連絡会</u>
平成30年4月20日	鉄道・運輸機構に対し要望	同上
平成30年5月7日	鉄道・運輸機構に対し抗議	同上
平成30年5月16日	長崎市に対し要請 (2回目)	同上
平成30年6月12日	市議会に対し陳情 (6/20教育厚生委員会審査)	同上
平成30年7月30日	長崎市に対し要請 (3回目)	同上

位置図



番号14・15

平成30年9月中撤去予定

番号12・13

撤去済み

番号1~4

平成30年12月頃撤去予定

番号5~11

撤去済み

祖父の防空壕 3世代訪ねた

長崎 被爆直後に避難 取り壊し前に

被爆体験を一人芝居で伝え、79歳で亡くなった被爆者の家族が今夏、長崎市の防空壕跡を訪れた。被爆直後に避難した防空壕だが、新幹線建設で壊されると知り、親子3世代で足を運んだ。「私も次の世代に伝えたい」。祖父が被爆した年齢と同じ13歳の孫は語った。



◎渡辺司さんが残した証言記録を手に防空壕跡を見る長谷川恵さん(左)、凜音さん(中央)、渡辺妙子さん(19日、長崎市天神町、小川裕介撮影)がんと闘いながら一人芝居を演じる司さん(2011年8月5日、森下東樹撮影)



長崎市天神町の防空壕跡に9日、3人が姿を見せた。長崎市の元教師、故渡辺司さんの妻妙子さん(88)、横浜市に暮らす長女の長谷川恵さん(52)、孫の凜音さん(13)。凜音さんは初めて訪れた防空壕跡をじっと見つめた。

渡辺さんは爆心地から1・6kmの自宅で被爆。火災が広がる中、負傷した母親らと防空壕に避難した。中に外国人捕虜がおり、血を流す母親らを奥の畳に座らせ、水を飲ませてくれた。心臓病や臍臓がんを抱えながら、2011年に亡く

なる直前まで237回公演した。芝居では、孫娘にせがまれてあの日を語る設定で、母親と必死で逃げた体験を生々しく再現した。

渡辺さんが亡くなる約2年前、恵さんは次世代に残したいと父の被爆体験を書き始めた。被爆前後の出来事を書いてもらい、手紙や電話で確認しあっていた。悲惨な場面を描く度にシ

ョックを受けた。渡辺さんが亡くなると、筆が止まった。体験してない自分に分かるのか、平和を訴えるなんておこがましいのではないか。

そう悩んでいた昨夏、小学6年だった凜音さんの作文を読んだ。父の体験をつづり、こう記していた。
「私一人の力では、世界にうたったえかけるのは難しいでしょう。でも、もし私のお話を聞いて「平和にしたい」と思ってくれる人が何人もいたら、一人の力より

も大きな力になります」
恵さんは驚いた。凜音さんは一人芝居を見たことがなく、被爆体験を直接聞いたことはない。ただ、恵さんが被爆の話聞かせていた。「シンプルに感受性に訴えかければ伝わる」。迷いは消えた。

父の体験をまとめた「物語」は今春、完成した。そんなとき、防空壕跡が取り壊されると聞いた。長崎市によると、九州新幹線西九州ルートの特設トンネル工事に防空壕跡が複数見つか

り、鉄道・運輸機構は「安全性確保のために撤去する必要がある」という。

凜音さんの年齢が、父が被爆した年齢に達し、一緒に訪ねてみようと思った。3人は防空壕跡や自宅跡を訪れ、黙禱した。

「怖かった。でも知りたかった」。凜音さんは被爆当時の様子を質問した。煙突の下敷きになり亡くなった友人、ガラスが突き刺さった渡辺さんの母……。妙子さんは「じいちゃんには戦争が憎いとずっと伝えたか

つたんだよ」と言った。
凜音さんはうなずいた。「祖父が一人芝居で伝えようとした体験を、自分が大人になったら子どもたちに伝えたい」(小川裕介)